

誰もが安らげる場をつくりたい



カレーライスを受け取る子ども。
「おいしそうだね」



食堂の準備を進める寺岡さん



ふれて子ども食堂

市内で初めての子ども食堂が7月から白樺町の地域交流ホームふれてで始まった。親の多忙などから十分な食事が取れなかったり、一人きりで食事をしたりする子どもを減らそうと、安価で食事を提供する試みだ。近年、全国的に広がりを見せている。

ふれて子ども食堂の場合は、子どもだけではなく、1人暮らしの高齢者などにも気軽に参加してもらい、交流につなげることが目的だ。ふれてで活動している市民スタッフなどがボランティアで働いている。中心になっているのは、地域のお茶の間運営委員長の寺岡和彦さんだ。

6月のプレオープンでは約40人が手作りのカレーライスを味わった。通常は月1回の予定だが、夏・冬休みの時期は回数を増やす。今月は3日と10日に開き、新しいメ

ふれて子ども食堂の運営に携わる

寺岡 和彦さん

てらおか・かずひこ
南町在住。
北広島団地活性化検討委員会の公募委員として、団地地区の交流促進に尽力。
平成22年から「第二住区地域のお茶の間」運営委員長を務める。26年には、同運営委員会の功績が認められ「北海道福祉のまちづくり賞」を受賞した。

ニューも加える予定だ。

団地地区の活性化を探る

寺岡さんが札幌から北広島団地に移り住んだのは昭和57年。地区に次々と家が建ち人口が増え、にぎわっていた頃だ。しかし、年月とともに高齢化が進み団地内の人口が減少していった。そんな地域の様子を見て、「人口減少を食い止めることは難しいが、速度を緩和させることはできないだろうか」と考え活動を始めた。平成21年に北広島団地活性化検討委員会の委員に就任。同委員会が企画した「手作り野菜の収穫祭」の事務局も担当している。

第二住区の「地域のお茶の間」事業立ち上げにも携わった。コンサートや講演会、落語会など多彩なイベントを開催し、毎回50〜70人の参加がある。「知らない人同士がイベントに来て触れ合う。そうすれば、このまちに住み続けたい

と感じてくれるでしょう。そう信じている。

活動を生きがいに

始まったばかりの子ども食堂。これからの課題は周知をすることだ。「この取り組みを本当に必要としている人に情報が届くよう、継続しなければ」と力を込める。

安心して食べてもらうことと経費削減のため、夏と秋に使用する野菜を自分たちで育てている。畑の所有者が無料で土地を貸してくれた。寄付をしてくれる賛同者もいて、支援の輪が広がっている。

「子どもたちや高齢者に安らげる居場所を提供したいと始めた食堂が、私自身とスタッフの生きがいになりました。活動を続けるため、お互い健康に気を付けようと話しているんですよ」。

まちを元気にするのは、人々とのつながり。強い信念の下、寺岡さんの活動は続くだろう。

